

ヴェーダ文献における発酵乳とSomaの 神話—sāmnāyya を中心として

西村直子

0. はじめに

古来、インドには多様な乳製品が伝えられているが、それらの殆どは乳酸発酵によるダディ *dadhi* を出発点としている。*dādhi-* という語は、ヒンディー語のダヒ *dahi-* に相当する。

古代のインドアーリヤの諸部族は、牛を中心とする遊牧生活を送り、イランやアフガニスタン等の地域を経てインドに入ったと考えられる。現代のヒンドゥー文化に連なる牛の神聖視は、紀元前1200年頃に編集固定された、最古の Rig-Veda (Rg-Veda: RV) にまで遡ることができる。それは、牛を犠牲とする儀礼を行わなかったということを必ずしも意味しないが、動物犠牲祭の一般的な供物は山羊であり、牛ではない。彼らが牛を殺すよりも、そのミルクを食料として役立てていたことは明らかであり、乳製品が彼らにとって重要だったことは、彼らがそれを神々に捧げる供物として常に用いていたことから容易に推測できる。本稿では、ヴェーダ文献に現れる発酵乳製品を概観し、彼らにとっての乳製品の重要性を「発酵乳と Soma との同一視」という神話的／神学的側面から考察してゆく。

1. ヴェーダ文献に現れる発酵乳加工—*dādhi-*, *sāmnāyyā-*, *āmikṣā-/payasyā-*

1-1. ダディ *dādhi-*

牛乳は自然に乳酸発酵を起こして発酵乳 *dadhi* となる。Veda やパーリ Pāli 文献の記述から、古代の Ārya 人は牛乳が自然に乳酸発酵することを知っていたと考えてよい¹。他方、彼らはこの発酵を人為的に引き起こす方法をも知っていた。

1 Cf. 西村「Pāli 聖典における乳加工関連の定型句について—Rājasūya 祭の Mitra と Bṛhaspati に対する献供との比較」(東北大学文学会『文化』64-1・2, 2000, 159-180)。

現代でも、ヨーグルトと牛乳を混ぜておくとヨーグルトの乳酸菌が牛乳をヨーグルトに変えることはよく知られている。もとになったヨーグルトのことを種菌、スターターなどと呼ぶが、Veda ではアータンチャナ *ātāncana*-「凝固させるもの」と呼ばれている。Veda の宗教では、毎晩毎朝、熱した牛乳を捧げるアグニホートラ *Agnihotra* という儀礼を行う。*ātāncana* には、この儀礼の供物の残り、つまり熱した牛乳の残りが基本的に用いられる。ただし、代用品としていくつかの植物も認められている。植物による乳加工技術も、Ārya 人は知っていたことになる²。

ところで、発酵乳である *dadhi* はそれ自体が供物となるだけでなく、別の供物の材料としても用いられる。それが、サーンナーイヤ *sāmnāyā-*、アーミクシャー *āmikṣā-*、そしてパヤスヤー *payasyā-* である。これらは、辞書では「甘い牛乳と酸っぱい牛乳との混合物」などと説明され、特に *āmikṣā* と *payasyā* とは同義語と見なされて *sāmnāyā* との違いも明確にはされていない³。以下、これらの異同について要点を述べてゆきたい⁴。

1-2. サーンナーイヤ *sāmnāyā-*

sāmnāyā を巡る議論は、新月祭・満月祭に関する章にまとまって語られている。*sāmnāyā* は、準備日の晩に搾った乳を加熱してシュリタ *śṛta-* とし、凝固剤 *ātāncana* を加えて *dadhi* にしたものと、翌日の本祭、すなわち献供を行う日の朝に搾って加熱した乳 (*śṛta*) とを混ぜ合わせて献供される。混ぜ合わせる作業は、献供の直前に行われる⁵。このことは、*dadhi* と加熱した牛乳 *śṛta* と

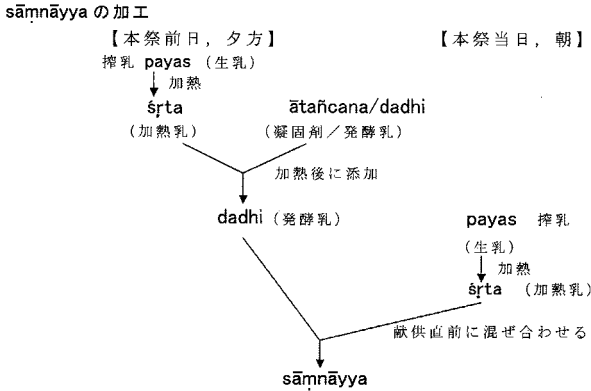
2 Cf. 後述2. 並びに西村 op.cit., n.16.

3 E.g. BÖHLINGK-ROTH, *Sanskrit-Wörterbuch* (1852-1875), RENOUE, *Vocabulaire du Rituel védique* (1954), MYLIUS, *Sanskritischer Index der jungvedischen Namen und Sachen* (1976-1977) ss.vv.

4 これらを巡る文献学的・言語学的議論については、cf. NISHIMURA “*āmikṣā* and *payasyā*: Processing of fermented milk in ancient India” (『印度学仏教学研究』59, 印刷中)。

5 *ĀpŚrSū* II 20,3 [新月祭・満月祭] *samavadāya dohābhyām* |3| *dadhno 'vadāya śṛtasyāvadyaty. etad vā viparītam. |sarvāni dravāṇi sruṁmukhena juhoti.* |4| 「3. 二つの搾乳したものを取り分けて合わせてから [献供する]。4. *dadhi* を取り分けてから *śṛta* を取り分ける。或いはこれは逆になる。すべての液体たちを柄杓の口を通して献供する」。

が別々の容器に入られていることから明らかである⁶。混ぜてすぐに献供してしまうため、sāmṇāyya には目に見えるほどの乳酸菌の作用はなかったものと考えられる⁷。



1-3. アーミクシャー *āmikṣā*

āmikṣā 献供を行う際の搾乳は、sāmṇāyya の規定に従って行われる⁸。つまり、準備日の晩に搾乳、加熱と凝固剤の添加を行い、翌朝、本祭当日にも搾乳と加熱とを行う。この手順は、チャートウルマースヤ Cāturmāsya という季節祭の議論の中で述べられる⁹。sāmṇāyya と異なるのは、準備日に作った *dadhi* を混ぜるタイミングである。*āmikṣā* 製造では、朝に搾った牛乳を熱している時

6 E.g. BaudhŚrSū I 14:22,3; ĀpŚrSū II 11,8-9.

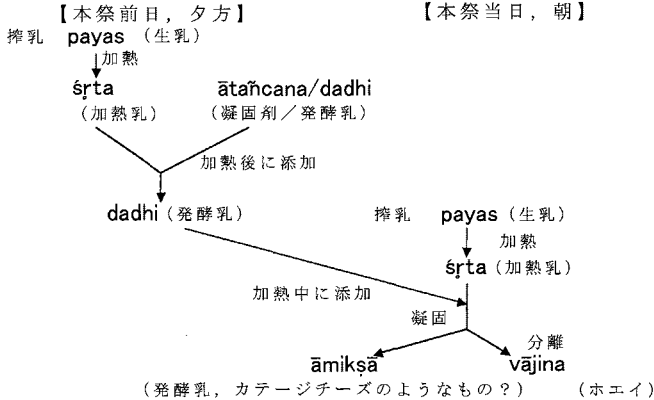
7 E.g. MS IV 1,3:5,8-12^p [新月祭・満月祭] ~ KS XXXI 2^p ~ TB III 2,3^p; BaudhŚrSū I 3:5,7-10; ĀpŚrSū I 13,10-11; 13-15; KātyŚrSū IV 2,33 等。 Cf. NISHIMURA op.cit. n.4-6.

8 E.g. ĀpŚrSū VIII 1,9.16: *agnīn anvādhāya śākhām āhṛtya vaiśvadevyā āmikṣāyā vatsān apākaroti ...* [9] *pūrvavad vaiśvadevyāḥ sāyaṃdoham dohayati.* [16] [9. [三つの] 祭火達を分配してから、枝を取ってきてヴィシュヴァデーヴァ Viśva- Deva- (「一切神」) に捧げられる *āmikṣā* の為に仔牛達を [牝牛から] 引き離し [て牝牛達を放牧させる] ...16. 以前の (前述の sāmṇāyya の時) と同様に、Viśva- Deva- に捧げられる [*āmikṣā*] の為に夜の搾乳を搾乳させる。

9 4つの季節祭から成る Cāturmāsya 祭の中、ヴァイシュヴァデーヴァ Vaiśvadeva 祭では Viśva- Deva- に、ヴァルナプラガーサ Varuṇapraghāsa 祭ではマルツ Marut 達とヴァルナ Varuṇa といった神々に捧げられる。 Cf. EINO, Shingo, *Die Cāturmāsya oder die altindischen Tertialopfer dargestellt nach den Vorschriften der Brāhmaṇas und der Śrautasūtras* (Tokyo 1988), 13f. また、新月満月祭の変化形であるダークシャーヤナ Dākṣāyana 祭では、ミトラ Mitra と Varuṇa に捧げられる。

に *dadhi* を混ぜる。牛乳のタンパク質は酸と熱との影響によって凝固し、水分と分離する。固体部分が *āmikṣā* であり、カテージチーズのようなものと考えられる。一方、分離した水分をヴァージナ *vājinā-* と呼ぶ。これはホエイ（乳清）に相当する。

āmikṣā の加工



1-3. パヤスヤー *payasyā-*

payasyā に関して、製造方法を具体的に述べる記述は見られない。アーパスタンバ・シュラウタースートラ (*Āpastamba-Śrautasūtra: ĀpŚrSū*) では「*āmikṣā* のように作る」と言われる¹⁰。また、*payasyā* は *vājina* (ホエイ) と対を成すものとされていることから¹¹、凝固して水分が分離した固形部分を *payasyā* と位置づけることができよう。

ところで、*payasyā* については、*sāmnāyā* にも *āmikṣā* にも語られていない形状に関する情報を与える神話がソーマ Soma 祭の議論の中に伝えられている。ディールガジフヴィー (*Dīrghajihvī*) という魔女の神話である：

マイトラヤニー サンヒター *Maitrāyaṇī Saṁhitā* (MS) III 10,5:138,6-7^p

10 XII 4,11 [*Cāturmāsya, Varuṇapraghāsa*] *puroḍāśam adhiśṛityāmikṣāvāt payasyām karoti* 「プロードーシャ *puroḍāśa* (玄米または玄麦のパンケーキ) を火にかけてから、*āmikṣā* のように *payasyā* を作る」。

11 ŚB II 4,4,21 = II 5,1,15 [*Dakṣāyaṇa*] *yōṣā payasyā réto vājinam* 「*payasyā* は若い女である。*vājina* が *retas* (精液) である」。

Dīrghajihvī (魔女の名) は神々の Prātaḥsavana (朝に压榨・献供される Soma) を嘗め取った。それを [彼女は] 酔って吐き出した。それ (吐き出された Soma) は payasyā となった。それ故、payasyā は吐瀉物のような見かけを持つ (vīmādirūpā)。(*dīrghajihvī vai devānām prātaḥsavanām āvāleḥ. tād vyamādyat. sā payasyābhavat. tāsmāt payasyā vīmādirūpeva.*)

同じ神話が Kāṭha 派と Aitareya 派にも伝えられている (KS XXIX 1; AB II 22)。Aitareya 派では内容に若干異なる点があるが、MS と同様 payasyā の見かけを結びつけている。これに対して、KS では MS と同じ神話を語りながら、帰結の部分で唐突に āmikṣā が登場する。即ち、payasyā の神話が āmikṣā の見かけと結びつけられている：

カータカ・サンヒター Kāṭhaka-Saṁhitā (KS) XXIX 1:166,8^p

Dīrghajihvī は神々の祭式を嘗め取ったのだ、Prātassavana を。それを [D は] 酔って吐き出した。それは payasyā となった。それゆえ、āmikṣā は酔って吐き出されたもの (vimaditā 「吐瀉物」) のようである。payasyā が Prātassavana において用いられるのは、Prātassavana の完備の為にである。

(*dīrghajihvī vai devānām yajñam avāleḥ prātassavanaṁ. tad vyamādyat. sā payasyābhavat. tasmād āmikṣā vimadīteva. yat payasyā prātassavane bhavati prātassavanasya samṛddhyai.*)

āmikṣā と payasyā とが唐突に入れ替わっている例は、他学派の文献の、他の祭式に関する議論の中にも見られる¹²。従って、両者は同一の乳製品を指し、単に異なる名前と呼ばれていたものと考えられる。全 Veda 文献の用例分布を考慮すると、古い時代の文献では āmikṣā が、後の時代には payasyā が多用されるという傾向が見られる¹³。恐らく、「混ぜ込み」を意味する女性の行為名詞であった āmikṣā- (<ā-mikṣ-) は供物の名前に転用され、乳製品であることを明示する「payas (乳) に関する、から成る」という形容詞が独立して用いられ

12 E.g. ŚB IV 2,4,18; 5,18-22 [Soma 祭, Savanīya-puroḍāśa]. Cf. NISHIMURA “āmikṣā-and payasyā-” (→ n.3).

13 稿末の資料参照。

るようになっていったものと考えられる¹⁴。

2. 「凝固剤」 *ātāñcana-* と “*ātāñcana-mantra*”

牛乳を人為的に乳酸発酵させる際には、凝固剤／発酵促進剤（スターター）として *ātāñcana* を用いる。一般的な *ātāñcana* は、先述の通り Agnihotra 祭で用いられた牛乳の残りとしてされる¹⁵。Agnihotra は1日に2度、晩と朝とに熱した牛乳を献供する祭式であり、元来は太陽の運行を維持するためのものであったと考えられる。その牛乳の残りは自然に発酵し、凝固剤として用いられるが、代用品として植物の使用も認められている。その植物はナツメの一種（クヴァラ *kūvala-/kvāla-*, *Zizyphus jujube*）、胚を残して脱穀した大麦または米（タンドウラ *taṇḍulā-*）、パルナ *Parna* 樹（*Butea frondosa*）の樹皮（*parṇavalkā-*）、そしてマメ科植物の一種であるプーティーカ *pūtīka-*（*Caesalpinia bonduc*. Roxb¹⁶）である。これらの中には作用成分の不明なものもあるが、*Parna* や *Pūtīka* に含まれるタンニンはタンパク質を変質させる働きを持ち、これが凝固剤としての役目を果たすものと推測される。これに対し、先述の *ātāñcana* は酸が作用して牛乳を凝固させる。両者は何れも牛乳のタンパク質を凝固させるものの化学組成は異なり、得られる凝乳も化学的には異なるものと考えられる。しかしながら、Veda の祭官たちには、化学的な組成の差異は知り得なかったであろう。彼らにとって重要だったのは、凝乳／酸乳を得ることであった。その背後にある事情は、発酵乳を巡る神話や神学議論の中に見出される。

先述の *sāmnāyya* に関して、ヤジュルヴェーダ *Yajurveda* では何れの学派にも *ātāñcana* 添加の際に唱えられる *mantra*（祭詞、呪文の一種。以下 “*ātāñcana-mantra*”）が伝えられている。祭式の体系化が進んだシュラウタースートラ *Śrautasūtra*（儀規文献）の段階では、*sāmnāyya* 献供を行う特殊な新月祭で唱えることが定められている¹⁷。*mantra* は *Yajurveda* の各学派の伝承に異なる点

14 更に、彼らが興奮剤として用いていた Soma（麻黄）との関連が背後に推測される、cf. NISHIMURA op.cit., 3. Conclusion.

15 E.g. ŚB XII 4,2,8; BaudhŚrSū I 1:2-3; XX 4:11,4-6; XX 4:12,15-13,3; ĀpŚrSū I 13,12.

16 Cf. KUIPER “Was the *pūtīka* a mushroom?” *Fs. Dandekar* 219-227, Delhi 1984

17 西村『放牧と敷き草刈り－*Yajurveda-Saṁhitā* 冒頭の *mantra* 集成とその *brāhmaṇa* の研究』（2006、東北大学出版会）、128ff.

も見られるが、大筋では「インドラ Indra の為に『君』を、Soma によって私は凝固させる」という内容で一致している。「君」というのは、ミルクのことである。この mantra から、Soma によって凝固したミルクを Indra への供物としていたことが窺われる。

MS I 1,3:2,10— 11^m (m: mantra 部分)

Indra の為に、君を、(Indra の) 分け前として、Soma によって私は凝固させる。(indrāya tvā bhāgām sómenātanacmi.)

MS IV 1,3:4,10— 12^p (p: 散文部分: mantra 解釈すなわち brāhmaṇa)

< Indra の為に、君を、分け前として、Soma によって私は凝固させる>と [唱える]¹⁸。当のもの(乳)を他ならぬ Soma にすることになる¹⁹。他方、つまり、このように知りつつ sāmnāyya を飲むと、その人によっては Soma 喫飲 [の効力] が継続されているのだ。

(<indrāya tvā bhāgām sómenātanacmi->īti. sómam evāinat karoti. tāsya ha tvāi somapīthāh sāmtato yā evām vidvānt sāmnāyyām pībati. ||)

KS には、sāmnāyya と Soma との同一視を暗示する記述が見られる：

KS I 3:2,7^m

Indra の分け前として、君を、Soma によって私は凝固させる。

(indrasya tvā bhāgām sómenātanacmi.)

KS XXXI 2:3,12— 14^p

< Indra の分け前として、君を、Soma によって私は凝固させる>と唱える。当のもの(分け前: bhāga-?) を Soma と彼は為すことになる²⁰。sāmnāyya

18 Cf. MānŚrSū I 1,3,34

19 *kr* の目的語に置かれる enclitic の代名詞 *ena-* の、述語名詞の性・数への一致については、n.20 参照。

20 或いは、「Soma を当のもの (*enam*, m. acc.) と成すことになる」か。MS IV 1,3:5,10— 11^p: *sómam evāinat karoti*; KapS XLVII 2:335,19— 20^p: *somam evainam karoti*. (the ms *evaitar*); TB III 2,3,10^p *sómam evāinat karoti*. 「当の物 (neut.sg.: *pāyas-*) を Soma にすることになる」。ena- には論理的述語名詞への性・数の一致の現象 (Kongruenz) は起こらないものと思われる。Cf. MS IV 1,2:3,14— 15^p (= KS XXXI 1:2,3^p) *asyā evāinat rāsnām karoti* 「他ならぬ彼女の為に、当の物 (*barhiṣ* / 紐) を帯にすることになる」(『放牧と敷き草刈り』268f. 及び n.822)。KS の *enam*

は神々に属する間接的な Soma なのだ²¹。他方、つまり、このように知っている者が *sāmnāyya* を用いて祭るならば、彼によって Soma 喫飲[の効力]が継続されているのだ。(<*indrasya tvā bhāgaṃ somenātanacmi->ūti. somam evainaṃ karoti. somo vai devānāṃ parokṣaṃ sāmnāyyaṃ. tasya ha tvai somapīthas saṃtato ya evaṃ vidvān sāmnāyvena yajate.*)

更に、*sāmnāyya* と Soma との同一視をより明瞭に述べるのが以下の TS/TB である：

タイッティリーヤ・サンヒター *Taittirīya-Saṃhitā* (TS) I 1,3,1^m (m)

Soma によって君を私は凝固させる、Indra の為に、*dadhi* へと。(*sómena tvātanacmīndrāya dādhi.*)

タイッティリーヤ・ブラーフマナ *Taittirīya-Brāhmaṇa* (TB) III 2,3,10-11^p

<Soma によって君を私は凝固させる、Indra の為に、*dadhi* へと>と唱える。他ならぬ Soma へと、当のもの(乳)を成すことになる²²。Soma を嗜んでから丸一年間 Soma を飲まない者があれば、彼の Soma 喫飲[の効力]は再び嗜まれるべきものとなるのだ。(しかし、) *sāmnāyya* は、周知の如く、Soma なのだ。このように知りつつ *sāmnāyya* を飲む者があれば、彼の Soma 喫飲[の効力]は再び嗜まれる必要のないものとなるのだ(もはや Soma 祭を挙行する必要がなくなる)²³。(<*sómena tvātanacmīndrāya dādhi->īty āha. |10| sómam evainat karoti. | yó vái sómaṃ bhakṣayitvā | samvatsarām sómaṃ ná pībati, | punarbhákṣyo śya somapīthó bhavati. | sómaḥ khālu vái sāmnāyyaṃ. | yá evaṃ vidvānt sāmnāyyaṃ pībati | apunarbhákṣyo śya somapīthó bhavati. |*)

は、*bhāga-*「分け前」を指すものとも、一致の現象がここでは起きているとも考えられる。KapS の *enam* は、ms の読み *etat* (やはり、*pāyas-*を指すか)を編集者が KS に倣って変更したものであろう。

21 ŚB の挿話を踏まえた記述か。後述3. 参照。

22 n.20参照。

23 Soma 祭の効力は1年間しか続かない、と言う議論が背景に推測される。*sāmnāyya* を行えば以後 Soma 祭は必要ない、とも解釈できるが、毎年(少なくとも)1回、*sāmnāyya* による新月祭を Soma 祭の代わりに行うべし、の意とも解釈できる。TB の説は、MS・KS の説をより明確にしたものと考えられる。

Soma は、血圧上昇や興奮作用をもたらす麻黄 Ephedra と考えられる。Veda では、Soma の絞り汁を飲んで興奮状態に入ることが宗教的に、また恐らくは武力闘争の場面においても、重要なものとされていた。この mantra の意義を述べる brāhmaṇa は、上記の保守的な黒 Yajurveda 学派の諸文献 (MS, KS, TS/TB) においては sāṃnāyya と Soma とを関連づけ、特に Kāṭha 派と Taittirīya 派は sāṃnāyya と Soma との同一視を明確に述べている。革新的な Vājasaneyin 派は mantra 解釈における Soma への言及を欠くものの²⁴、より大きな、新月祭全体を巡る神話的枠組みの中で sāṃnāyya と Soma との結びつきを語っている (次章)。

3. Indra を sāṃnāyya によって回復させる神話: sāṃnāyya の由来

Indra と Soma との結びつきは Ṛgveda に遡れる。Indra は Veda の神々の中の英雄と位置づけられ、様々な功績が Indra に帰せられている。そういう Indra を力づける飲み物が Soma である。ātañcana-mantra はこの「Indra と Soma」という神話的モチーフを背景とし、前述の brāhmaṇa における mantra 解釈は、新月祭をその文脈に組み込もうという意図の存在を示唆している。

他方、Indra と sāṃnāyya とのつながりは、黒 Yajurveda 学派の Maitrāyaṇī Samhitā と Kāṭhaka-Samhitā において、Indra によるヴリトラ Vṛtra 殺しの後日譚の中に明示される。Vṛtra は神々に敵対する魔物であり、Ṛgveda では Vṛtra 殺しの神話を雨期の到来と水の解放として位置づけることができよう。ただし、brāhmaṇa では Vṛtra 殺しと水との結びつきは必ずしも含意されていない。MS および KS に語られる sāṃnāyya の因縁譚は、Cāturmāsya という季節祭の議論の中で、āmikṣā への言及に先立って語られている: Vṛtra を殺した後、Indra の感官の力 (*indriyā-*)、英雄的な力 (*vīryā-*) は体内を出て水や草に入り込む。力を失った Indra を回復させるため、神々は牛たちにそれを集めさせ、ミルクとして回収して Indra に捧げる。つまり、牛たちが飲んだ水、食べた草の中に Indra の力が入り込んでおり、牛の体内でミルクになったのである。その牛乳を飲み、Indra は力を取り戻すのである²⁵。

24 ŚB の mantra 解釈では、sāṃnāyya の献供対象となる神格を Indra と指定することが論じられている。Cf. ŚB I 7,1,19.

25 テキストと翻訳は、稿末の資料参照。

牛たちが集めた (*sāmanayan*) ことが, *sāṃnāyā-* の語源説になっている。mantra 解釈の中で *sāṃnāyā* と Soma とを結びつけた *brāhmaṇa* と, この *Vṛtra* 殺しの後日譚とを比較すると, 後者が語源説を含んでいるという点で mantra 解釈よりも古い段階の神学議論を反映している可能性があるものの, なぜ *sāṃnāyā* を用いない *Cāturmāsya* の *brāhmaṇa* に *sāṃnāyā* の神話が語られているのか, という点は明らかではない。mantra 解釈はこの神話を前提とし, *Ṛgveda* 以来の「Indra が Soma によって元気を取り戻した」という神話と結びつけて, Indra を回復させた *sāṃnāyā* は実は Soma なのだ, という神学議論を展開させたものと思われる。*sāṃnāyā* と Soma との同一視は, MS 及び KS の段階では素朴な観念であったと考えられる。一方, TS と新層の ŚB は, 恐らく当時の祭式整備の進展と相俟って, より複雑な議論を展開させている²⁶。

Vṛtra を殺した後の Indra を *sāṃnāyā* によって回復させるというモチーフは, 黒 *Yajurveda* 学派の中では新層に位置づけられる *Taittirīya-Saṃhitā* において詳述, 拡大される (II 5,3,2-4^o, 稿末資料参照): Indra の感官の力, 英雄的な力を集めた牛たちから搾った (*prātyaduhan*) ミルク (*pratidūh-* 「搾り返し」?) は, Indra にぴったりと寄り添わなかった (*ná ... śrayate*)。そこで, 神々は牛乳を熱して *śṛta* を作り, Indra に与える。すると, これは Indra にぴったりと寄り添った。ところが, *śṛta* は Indra を養わない (*ná ... dhinoti*), つまり Indra の栄養とはならない。神々は *śṛta* を *dadhi* にする。すると, それは Indra の栄養となり, Indra は回復するのである。ここには *sāṃnāyā-* だけでなく *pratidūh-*, *śṛtā-*, *dādhi-* の語源説がそれぞれ語られる。より重要なのは, MS 及び KS では言及されなかった段階的乳加工が明記されていることである。そして, 最終的に Indra を回復させたものは *dadhi* である。この神話は, Indra を回復させるために必要なのは *dadhi* である, ということを示唆しているのである。

ただし, mantra 解釈の *brāhmaṇa* に見た *sāṃnāyā* と Soma との同一視は, この箇所では一切語られていない。いわば, MS および KS が *Cāturmāsya* 祭の章に伝える *Vṛtra* 殺しの素朴な後日譚だけを詳細に述べていることになる。TS が拡大させた *Vṛtra* 殺しの後日譚と *sāṃnāyā* との結びつきに, 更に Soma

26 このことは, *Taittirīya* 派の文献が *Maitrāyaṇīya* 派並びに *Kaṭha* 派のそれに比して新しく成立したことを示唆している。→次章4. 及び n.28

という要素を組み込んで新たな議論を展開させたのが、白 Yajurveda 学派のシャタパタ・ブラーフマナ (Śatapatha-Brāhmaṇa: ŚB) である²⁷。

これまで述べてきた黒 Yajurveda 学派は、より古い Veda 祭式の姿を伝える保守的性格を持つ学派であるが、これに対して革新的な立場をとったのが白 Yajurveda 学派即ち Vājasaneyin 派である。その ŚB (I 6,4,1-9) では、Indra の体内から感官の力 *indriyā-*、英雄的な力 *vīryā-* が出て行くというエピソードは語られない。Indra を回復させるものは Soma である、というところから sāmnāyā の議論は出発する: Indra は Vṛtra を殺した後、自分は失敗したと思いついて最果ての地へと赴く。彼を捜し出したのは火の神 Agni である。それは朔の夜であった。それ故に、新月祭では Indra と Agni とにパンケーキ (*puroḍāśa*) を捧げる。しかし、そのパンケーキは Indra を回復させることができなかった。神々は、Indra を回復させるのは Soma 以外にはあり得ない、と考える。ところで Soma は月である。朔の夜には、一晩中月が見えない。この時、月は地上の草たちや水たちの中に入り込んでいる。そこで、神々は Soma が入り込んだ水を飲み、草を食べた牛たちの乳を搾る。その牛乳には Soma が含まれている。それを Indra に sāmnāyā として捧げるのである。この中にも TS と同様に段階的乳加工が明記されているが、TS が *pratiduh* → (加熱) → *śṛta* → (凝固剤 *ātañcana* 添加) → *dadhi* という順序を挙げるのに対し、ŚB には無加工の牛乳を与える段階は見られない。最初に *dadhi* を与えて Indra は回復せず、次に *śṛta* を与えて目的が遂げられたという順番になっている。また、*dadhi* を作る際に「刺激あるものとなす (*tīvrī kr*)」という表現があることは注目に値する。*tīvrā-* という語は、Soma の絞汁の味の表現として RV に頻出する。ŚB の「刺激あるものとなす」という表現は、*dadhi* の酸味を Soma の味に見立てる観念を背景としたものかと推測される。sāmnāyā の乳加工は天界から地上へと降りてきた Soma を再び天界に戻し、満ち欠けを繰り返す月との同一視に基づいて Soma が天と地とを循環しているという大きな宇宙規模の祭式議論を導く基盤となっている。(→ n.27)

27 その詳細については、西村「月と神々の食物－ Śatapatha-Brāhmaṇa I 6,4 (新月祭の *upavasatha*)」(印度学宗教学会『論集』34, 2007, 239-264)及び“Change of the theory about Soma’s circulation in the Śatapatha-Brāhmaṇa”(『印度学仏教学研究』57-3, 2009, 1159-1155)参照。

4. おわりに－ Soma と発酵乳

sāmnāyya と Soma との同一視は、以下の順に強まっていると考えられる: MS → KS → TB → ŚB。KS が「sāmnāyya は神々にとっての間接的な Soma なのだ」とするのに対し、TB には「sāmnāyya は、周知の如く、Soma なのだ」とある (→2.)。上記の序列は、恐らくは各文献の成立年代に一致するものと思われる。TS には直接 sāmnāyya と Soma とを結びつける言及が見られないものの、mantra に「dadhi」とあること、Indra による Vṛtra 殺しの後日譚を拡大し、MS/KS よりも ŚB のスタイルに近似していること (→3.) などから、KS と TB との中間に位置づけられるものと考えられる²⁸。

また TB は、1年に1度定められている Soma の喫飲 (即ち Soma 祭) が、新月祭における sāmnāyya 献供によって免除され得ることを暗示している。この場合、Soma 祭は1年に1度 (恐らくは新年に) 举行されたものかと推測される。Soma 祭は一年の循環を司り、宇宙秩序を維持する働きを担っていると言えよう。更に、ŚB は、sāmnāyya と Soma との同一視に基づき、月の満ち欠けを Soma の循環と連動させる新しい理論を展開させる。これは、神々が天界を祭火として献供した Soma が順次 5つの祭火を巡って人間の誕生をもたらすという、後の五火説 (*pañcāgnividya*) の先駆を成すものであっただろう。

以上に基づき、Indra を回復させた sāmnāyya は Yajurveda の brāhmaṇa において Soma と同一視され、地上と天界とを循環していると考えられていたことが推測される。その展開の源は、個人の営為から宇宙秩序までのあらゆる事象を包括する枠組みの中に Veda 祭式を整備し、その効力を信じた祭官達の思弁にこそ求められるであろう。

28 更に、sāmnāyya 献供の対象となる神格を Indra/Mahendra に分化すること、sāmnāyya 献供に資格を設けていることも、ŚB との近似性を示唆している。Cf. 西村『放牧と敷き草刈り』(→ n.17) 134ff. 並びに149ff.

資料

āmikṣā : payasyā 用例分布 . (NISHIMURA “āmikṣā- and payasyā-” より再掲)

(網掛けは payasyā の用例数が āmikṣā の用例数を上回るものを指す ; ハイフンは用例のないこと, 斜線は該当文献の伝承がないことを意味する)

		Samhitā	Brāhmaṇa	Śrautasūtra	Others
RV		—	Aitareya 0 : 3	Āśvalāyana 0 : 1	RV-Khila 0 : 1 (V 7.4.1)
			Kaṣṣṭaki 0 : 14	Saṅkhāyana 0 : 7	
Black YV	Maitrāyaṇī	12 : 7	/	Mānava 3 : 2	—
	Kaṭha (Kap)	6 : 15 (3 : 3)	/	/	KāṭhśamkhKū 3 : 0 Lost Brāhmaṇa 1 : 0
	Taittirīya	9 : 5	7 : 2	Baudhāyana 51 : 2 Vādhūla 13 : 2 Āpastamba 19 : 11 Bhāradvāja 1 : 0 BaudhPitrSū 1 : 0 Hiranyakeśi 2 : 3 Vaikhānasa 3 : 1	BaudhPitrSū 1 : 0
White YV	Mādhy	2 : 1	SBM 4 : 32	Kātyāyana 3 : 11	KātyŚrSūSam 1 : 0
	Kāṇva	2 : 1	SBK 3 : 25		
SV		—	Jaiminīya 6 : 2	—	Jaim-GrSū 0 : 1
			Pañcaviṃśā —	Drāhyāyana 0 : 2 Lāṭyāyana 0 : 2	—
AV	Śaunaka	13 : 0	Gopātha 1 : 2	Vaitānāsūtra 1 : 0	—

VādhŚrSū は井狩彌介教授校訂の電子 text を使用した。BaudhŚrSū, ĀpŚrSū の電子 text は伏見誠氏入力のもの、ĀśvŚrSū, SāṅkhŚrSū は徳永宗雄教授入力のものである。

MSI 5,10:146,2— 5^{p29} (~KS XXXVI 1:68,5— 69,7^p)

Indra は Vṛtra を殺したのだ。彼は英雄的な力 (vīrya-) を散りぢりに失った。すると、この [英雄的な力] すべては水達に、草達に、樹木達に、入り込んだ。その事 (英雄的な力の回収) に神々は勤め励んだ。それを彼らは集め寄せた。それが sāmnāyā の sāmnāyā たる所以である。それ故、このように知っている者が sāmnāyā によって祭式を行うなら、彼は繁栄する。

īndro vāi vṛtrām ahant. sā viśvaḍ vīryeṇa vyārcchat. tād idām^[3] sārvaṃ prāviśad apā ośadhīr vānaspātīms. téna devā asrāmyams. tāt sāmānayaṃ^[4] s. tāt sāmnāyāyasya sāmnāyātvaṃ. tād yā evāṃ vidvānt sāmnāyēna yājata^[5] ṛdhnōti.

29 西村 op.cit. 135 n.385より再掲。

Taittirīya-Saṁhitā II 5,3, 2-4^{p30}

Vṛtra を殺し終えると、Indra の感官の力、英雄的な力は大地へと散り広がった。すると [それは]、草達、植物達となった。彼は Prajāpati のもとへ助けを求めて走った。「Vṛtra を殺し終えると、私の感官の力、英雄的な力 (*indriyā-vīryā-*) は大地へと散ってしまった。すると [それは] 草達、植物達となった」と (Indra は Prajāpati に言った)。すると Prajāpati は家畜達に言った。「これ (*indriyā- vīryā-*) をこの者の為に君達は集め寄せよ」と。それを家畜達は草達から自分の中に集め寄せた。それ (*indriyā- vīryā-*) を (神々は) 搾り返した (搾って取り戻した)。彼らが集め寄せた (*samānayan*) こと、それが *sāmnāyyā-* の *sāmnāyya* たる所以である。彼らが搾り返した (*pratyāduhan* 搾って取り戻した) こと、それが *pratidūh-* (搾乳されたばかりの乳) の *pratiduh* たる所以である。「彼らは集め寄せた。彼らは搾り返した。しかし、私にそれ (*indriyā- vīryā-*) は寄り添わない」と (Indra は言った)。「それを彼の為に加熱された物 (*śṛtā-*) と君達はせよ」と (Prajāpati は言った)。それを彼の為に加熱された物と彼らは為した。感官の力、英雄的な力を彼にその事によって (*śṛtā-*) 彼らは寄り添わせた (*aśrayan*)。それが *śṛtā-* の *śṛta* たる所以である。「彼らは集め寄せた。彼らは搾り返した。しかし、私をそれ (*śṛta*) は養わない」と (Indra は言った)。「それを彼の為に *dādhi-* とせよ」と (Prajāpati は言った)。それを彼の為に *dadhi* と彼らは為した。それは彼を養った (*adhinot*)。それが *dādhi-* の *dadhi* たる所以である。

indrasya vṛtrām jaghnūṣa indriyām vīryām pṛthvīm ānuvyārcat. tād oṣadhayo vīrúdhō 'bhavan. sá prajāpatim úpādhāvad. vṛtrām me jaghnūṣa indriyām vīryām ||2|| pṛthivīm ānuvyārat. tād oṣadhayo vīrúdhō 'bhūvann iti. sá prajāpatiḥ paśún abravīd. etád asmai sāmṇayatēti. tát paśáva oṣadhībhyó 'dhy ātmánt samānayan. tát pratyāduhan. yát samānayan tát sāmṇāyyāsya sāmṇāyyatvām. yát pratyāduhan tát pratidūṣaḥ pratidhuktvām. samānaiṣuḥ. pratyadhukṣan. ná tú máyi śrayata íty abravīd. etád asmai ||3|| śṛtām kurutéti abravīt. tád asmai śṛtām akurvann. indriyām vāvāsmin vīryām tād aśrayan. ták chṛtāsya śṛtatvām. samānaiṣuḥ. pratyadhukṣaṇ. chṛtām akran. ná tú mā dhinotīty abravīd. etád asmai dādhi kurutéty abravīt. tád

30 西村 op.cit. 152ff. より再掲。訳を改めた部分もあるが、論旨を左右するものではない。

asmai dādhi akruvan. tād enam adhinot. tād dadhnó dadhitvām.

ŚB I 6,4,1—9³¹

1. Indra は、彼が Vṛtra にヴァジュラ vajra (棍棒) を打ち据えた時に、その彼は自分が (以前より) 力弱くなったように思い、「私は打ち倒さなかった」かと恐れ、姿を隠した。彼は最果ての地へと向かった。神々は知ったのだ。「Vṛtra は殺されたのだ。そして (=それなのに) Indra は姿を隠した」と。2. (Indra) を搜索する事に彼らは取り掛かった、神格達の中では Agni が、聖仙達の中ではヒラニヤストゥーパ Hiranyastūpa が、韻律達の中ではブリハティー Br̥haṭī が。彼を Agni は見つけ出した。彼と共にこの夜に [Agni は] 戻った。彼 (Indra) が神々の中の良き者なのだ。彼らの中の勇者だからである。3. その際、神々は言った：「家に、今日は、我々のもとから旅に出ていた我々の中の良き者が留まるのだ」と。彼ら二人 (Indra と Agni) の為にこの際、あたかも連れ立ってやって来た二人の近親者か同僚かの為に、共通の玄米粥または山羊を (人が) 調理する事があるように—これは人間に関する場合で、神々に関しては供物である—、同様にこの二人 (Indra と Agni) の為に、この際、[神々は] 共通の供物を準備して捧げた、(即ち) Indra と Agni とに捧げる12皿分のパンケーキを。それ故に、Indra と Agni とに捧げる12皿分のパンケーキが用いられる。4. その際 Indra は言った。「私が Vṛtra に vajra を打ち据えた時、その際私は顔が引きつった³²。かくて私はまさしくやつれている。これでは私に滋養を与えないのだ。私に滋養を与えることになる物、それを私の為に君達は作れ」と。「そのとおりに (そうしよう)」と神々は言った。5. その際神々は言った。「Soma 以外の物は彼に滋養を与えることができない。他ならぬ Soma を彼の為に我々は集めよう」と。彼の為に Soma を [神々は] 集めた。輝く月ならば、これが神々の食物である王 Soma なのだ。その際、これ (月=王 Soma) が、この夜の間、東にも西にも見えていない時には、その時は、この (地上の) 世界に彼 (王 Soma) はやって来る。彼は他ならぬこの地上で水達と草達とに入り込む。彼 (王 Soma) が神々の中の良き物 (財産)

31 西村 op.cit. 158—164及び「月と神々の食物」(→ n.27) から再掲。訳を改めた部分もあるが、論旨を左右するものではない。

32 Cf. GORŌ, Toshifumi, Die „I. Präsensklasse“ im Vedischen (Wien 1987), p.335.

なのだ³³。それ (Soma) は彼らの食物であるから。彼がこの夜の間この地上の家に留まる (*amāvāsai*) こと、それ故にアマーヴァースヤー *amāvāsyā-* (朔の夜) という名がある。6. [神々は] それ (王 Soma) を求めて牛たちを配備し、集めた。[牛達が] 草達を食べた時は、その事によって草達から、水達を飲んだ時には、その事によって水達からそれ (Soma) を。そのようにして集め、固め、刺激ある物と為して、それを彼 (Indra) に [神々は] 差し出した。7. 彼 (Indra) は言った。「これ (*dadhi*) は私に滋養を与えはするが、しかし、私に寄り添いはしない。これが私に寄り添うことになるように、そのように君たちは工夫せよ」と。彼に、加熱した (*śṛta-*) [乳] を彼ら (神々) は寄り添わせた (*aśṛayan*)³⁴。8. その際、この事によって全く同一の物であるのに、乳に他ならないのに、Indra に属する物に他ならないのに、しかし、これを丁度様々に人々は呼ぶのだ。彼が「これは私に滋養を与える (*dhinoti*)」と言った、その故に [それは] *dādhi*- 酸乳である。次に、当人に他ならぬ温めた [乳] を [神々が] 寄り添わせた (=付与した、彼の身に止まるようにした *aśṛayan*)、その故にそれは *śṛtā-* 加熱した [乳] である。9. すると丁度 Soma の茎が (搾られた後に水の中で) 膨らむ (増大する、力で漲る) ように、そのように彼 (Indra) は力で漲った。悪を、[顔色の] 黄色い (悪い) ことを打ち退けた。他方、これが新月に属する [供物] (= *sāmnāyya*) の結びつき (因縁) である。その際、このように知っている者が *sāmnāyya* [の献供] を行うならば、まさしくこのように、子孫、家畜達によって増大する事になる。彼は悪を打ち退ける。それ故に、人は *sāmnāyya* [の献供] を行うべきなのだ。

33 *tād* は Soma を指す代名詞が、論理的述語名詞 *ānnam* (neut.) へ的一致によって中性で現れたもの。直前の文 *sá vái devānām vásu* ではこの一致が見られない。この場合は *sá* で表される Soma が未知の情報として強く指示されており、日本語では「神々の中の良き物とは彼なのだ」、又は「彼が神々の中の良き物なのだ」と訳せる。Cf. n.20

34 TS II 5,3,2-4^p では① *pratidūh-* (搾りたての乳)、② *śṛtā-* (加熱した乳) の順で与えるが、いずれも Indra を回復させる事ができず、3番目に *dādhi* (酸乳) を与えて成功する。TS II 5,3,4-5^p では、献供時 (2日目) に酸乳と加熱した乳とのどちらを先に取り分けるべきか、という問題提起が為されている。TS ではこの神話に従い、始めに加熱した乳を、次に酸乳を取り分けるべく規定している。この議論の中に引かれる酸乳を先にすべきであるというブラフマヴァーディン *Brahmavādin* 「ブラフマンについて議論する者」の説は、SB の神話の内容と一致している。

indro ha yātra vṛtrāya vājraṃ prajahāra | só 'balīyān mānyamāno nāstrṣṭīiva
bībhyan nilayāṃ cakre. sá pārāḥ parāvāto jagāma. devā ha vái vidām cakrur.
ható vái vṛtró 'héndro nyáléṣṭéti ||1|| tám ánveṣṭuṃ dadhrire | agnír devátānām
hīranyastūpa ṣṣṇām bṛhatī chāndasām. tám agnír ánuviveda. ténaitām rátrim
sahājagāma. sá vái devānām vásur. vīró hy èṣām. ||2|| té devā abruvan. | amā
vái no 'dyá vásur vasati yó nah prāvātsīd íti. tábhyaṃ etád yáthā jñātībhyām vā
sákhībhyām vā sahāgatābhyaṃ samānām odanām páced ajām vā tád áha mānuṣām
havír devānām, evám ābhyaṃ etát samānām havír nīravapann, aindrāgnām
dvādaśakapālaṃ puroḍāśaṃ. tásmād aindrāgnó dvādaśakapālaḥ puroḍāśo
bhavati. ||3|| sá índro 'bravīti. | yātra vái vṛtrāya vājraṃ práharaṃ tád vyāsmaye. sá
kṛśá ivāsmi. ná vái medām dhinoti. yán mā dhinavat tán me kurutéti. tathéti devā
abruvan. ||4|| té devā abruvan. | ná vā imám anyát sómād dhinuyāt. sómam evāsmái
sám̐bharāméti. tásmái sómam sám̐bharann. eṣá vái sómo rájā devānām ánnaṃ
yác candrámaḥ. sá yātraisá etām rátrim ná purástān ná paścād dadṣé tád imám
lokám āgachati. sá ihāvāpas cāuśadhīs ca právisati. sá vái devānām vásu. ánnaṃ
hy èṣām tád. yád eṣá etām rátrim ihāmāvāsati tásmād amāvāsyā náma. ||5|| tám
góbhīr anuviṣṭhāpya sám̐bharan. | yád ośadhīr áśnaṃs tád ośadhibhyo. yád apó
'pibaṃs tád adbhyás tám. evám sambhṛtyátácyā tīvrīkṛtya tám asmái práyachan.
||6|| só 'bravīti. | dhinóty evá medām nèva tú máyi śrayate. yáthedám máyi śráyātai
tathópajānūtéti. tám śrténaiváśrayan. ||7|| tád vā etát | samānām evá sát páya evá sád
índrasyaivá sát tát púnar nānevácakṣate. yád ábravīd dhinóti méti tásmād dádhy.
átha yád enaṃ śrténaiváśrayaṃs tásmāc chṛtám. ||8|| sá yáthāmsúr āpyāyeta | evám
āpyāyatāpa pāpmānaṃ harimānaṃ ahataiṣá u āmāvāsyasya bāndhuḥ. sá yó haivám
vidvánt samnāyaty evám haivá prajāyā paśúbhīr āpyāyaté 'pa pāpmānaṃ hate.
tásmād vái sám̐nayet ||9||

Fermented milk and the legend of Soma in the Veda.

Naoko NISHIMURA

We find various kinds of dairy product in Indian literature, i.e. the oldest religious texts known as Veda with their subsequent texts. Almost all of the products are processed based on *dadhi* which is produced by fermentation caused by lactic acid bacteria. *dādhi-* is the old form of Hindī *dahi-*. This article discusses mythological and theological issues related to fermented milk products.

Fresh milk changes into fermented milk *dadhi*, through the activity of lactobacilli. Ancient Āryas knew how to ferment milk intentionally by means of a “starter.” In the Veda, it is called *ātañcana-* “coagulant.” *dadhi* is not only an offering in itself, but also a material for some further products e.g. *sāmnāyyā-* which is offered in the New Moon Sacrifice. *sāmnāyya* is a mixture of *dadhi* with boiled milk (*śṛtā-*). Every Yajurveda school has a mantra recited with adding *ātañcana* to boiled milk. The mantra was recited in the special New Moon Sacrifice in which *sāmnāyya* is offered instead of the pancake which later became usual: “I coagulate you (milk) with Soma (Ephedra).” The one who is expressed by the 1st person is the *Adhvaryu* priest, and that in the 2nd person is milk. We could infer that milk curdled with Soma was offered to Indra who is the heroic god par excellence.

Close examination will reveal that the strength of the argument for the identity of *sāmnāyya* with Soma increases in this order: MS → KS → TB → ŚB; while the KS “*sāmnāyya* is the Soma for the gods in an invisible sense,” in the TB “*sāmnāyya* is verily, as well known, Soma.” The above mentioned order seems to correspond to that of the time periods during which those texts were codified. The ŚB, furthermore, based on the identification of *sāmnāyya* with Soma, evolves a new theory which makes the moon’s waxing and waning operate together with circulation of the Soma. Based on the foregoing discussions, we may say that *sāmnāyya* which revitalises Indra is identified with Soma, which is regarded as that which circulates around the yonder world and this one. We should seek the origin of such an evolution in the spirit of the Vedic priests who formulated a system of Vedic ritual in a framework comprehending everything from personal conduct to the cosmic order, and credited Vedic ritual with efficacy.